九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

服部さんと勝山館跡整備事業

松崎, 水穂
元上ノ国町教育委員会主任学芸員

https://doi.org/10.15017/1508406

出版情報：歴史を歩く時代を歩く ： 服部英雄退職記念誌 ： とことん服部英雄, pp.267-269, 2015-03-31. 九州大学大学院比較社会文化研究院服部英雄研究室
バージョン：
権利関係：

服部さんと勝山館跡整備事業

松崎　水穂

服部さんが退官されるというご案内を頂戴した。

服部さんにご厚誼を頂くようになったのは一九七六・七七年の上之国勝山館跡・花沢館跡の保存管理計画書策定業務に携わった時からであった。七五年の夏に国指定申請書を提出しているのでその時から服部さんは上ノ国の館跡に関わっておられたのかも知れない。

一九七七年策定の保存管理計画書で北海道大学足達富士夫先生により、「遺構の整備に際しては前もって十分な調査を行う」「史実を尊重し、想像に基づく不正確な復原は行わない」「復原は資料が明らかな場合でも必要最小限にとどめ『歴史の表現』を重視し、現状を尊重する」ことが整備の基本方針とされ、[1] 七九年度から一〇カ年計画で史跡環境整備事業が開始された。初めての国庫補助事業に戸惑い、随分とご心配・ご迷惑をおかけした。記念物課から直接電話でお叱りを頂くことが一度ならずあった。

計画が半ばを迎えた頃になっても大量の遺物が出土するにもかかわらず遺構が把握できず、しかも擦文時代と近世アイヌ社会の中間、「非和人社会（〝中世アイヌ〟）的な遺物」である骨角器が未製品・破損品も含め数百点出土するなどのことが重なり、「和人」が夷島進出の拠点として築いた（アイヌ民族に対抗するための）勝山館跡の位置付けが危ぶまれる事態となっていた。このことを最も危惧されたのは主任調査官の仲野浩先生であった。八九年から朝尾直弘、網野善彦、石井進、榎森進、仲野浩の諸先生を勝山館跡調査研究専門員にお迎えし、歴史学的に検討して頂くことになり、記念物課からは服部さんがお出でになった。北海道教育委員会文化課の木村尚俊さん（故人）とともにお力添えを賜り、二〇一〇年度までの長期に亘って史跡整備事業が継続されることに繋がった。[2]

二〇〇一年石井先生が急逝された。

偲ぶ会で服部さんが悲しみを懸命にこらえ、衣鉢を継ぐ固い決意を述べていた。[3]

石井先生は史跡整備の復元は史実に即し、最小必要限度に、といつも仰有っていた。[4]

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

二〇〇七年だったと思う。勝山館跡の柵列について電話を頂いた。基本的に布堀にして丸木を立て並べること、柱（柱欠）間隔は比較的密であること、据え付け時に安定させるために突き固めや打ち込みがされた可能性はあるが、柱痕跡の底は平らであること、東側北側は厳重で、場所によって三～四列検出され、（他に崩落・消失も含め）立て替え・継続して設置されたと考えていることなどをお伝えした。

勝山館跡では一九八三年勝山館跡頂部の土塁上で検出した溝と内部の柱穴を柵と解釈し、[5] 八五年に直径一二cm、地上高一・三五mのヒバ丸太で全長二六・四mの柵を復元した。丸太上端に銅板キャップを被せ、下部七〇cmを焼処理、二・六四mを一単位としてボルトで縛結し、腐食防止と構造の安定を図った。[6] 前述の様に計画年度の半ばになっても遺構の掌握が出来ず、第六年次の整備実施設計書で旧地形の

外観復元を主体とし、それまでに検出した遺構の整備を加えて、事業を終結する方向が示された、事業継続が危ぶまれた中での復元案であった。柵の立体復元事例はほとんどなく、耐用年数や腐朽・倒壊後の修理補助事業の見通しもなかったことから、足達先生の基本方針にもかかわらず、維持を優先したものとなった。その後、八九、九〇、九四～九五年度の館跡第二平坦面正面、東側縁の調査で、服部さんに報告した前述の様な遺構の検出をみ、櫓跡も想定された。柵は二〇〇二、〇三年復元整備し、[7]二〇一〇年、館跡頂部後方の損傷した（当初整備の）柵を補助事業により修復、復元した。[8]この間一部欠失もあったが、二五年ほど残存出来たことになる。

柵（木―丸太）の間隔、隙間について築城記は「一間の内に五本ばかり可立。（略）人クグラザル程に可立」とする。[9]服部さんは「柵はよほどに間隔を詰めて、横木も二、三本は設けないと人間が入ってくることは阻止できない。隙間が空いているから、そこから射撃されることを阻止もできない。」という。[10]袖中抄「ドクキノヤ」に「オクノエビスハ鳥ノ羽ノ茎ニ附子ト云毒ヲヌリテ　ヨロヒノアキマヲハカリテイルトイヘリ　附子矢ト云ハコレナリ（略）」とあった。[11]毒矢のことは「諏訪大明神絵詞」や「氏郷記」にもあり、かすり傷でも致命傷となることが記されている。勝山館跡の柵の間隔が密なことと関連するかと思っている。勝山館跡からも鉄砲玉は出土するが少数である。地区により柵の設置に粗密があり、毒矢の飛距離、チャシ跡との比較など検討すべきことは残るが、本州の定法に外れる築城方もあったのかもしれない。

年次ごとの調査概報で思いつきの憶測を書き連ね、ご指導ご批正のお願いを繰り返した。地方にあって文字通りの管見を正し、教導頂きたい一心であったが、「中世城郭の復原と史料学」（『遺跡学研究』四、二〇〇七）によって、服部さんの検証対象になり得ない、浅学・怠慢を覆うべくもないひどいものであったことを知らされた。服部さんはさらに「城郭復元無用論」として啓蒙を図っておられる。[12]いずれにしても勝山館跡の調査や整備は、今後とも検討、批判され、正されていくことと思われる。[13]

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

まちづくりや地域おこしの核となり、地域のアイデンティティー確立や文化情報発信の場として整備した城跡の役割、重要性が唱導される。[14]他方早くからその危うさは指摘されていた。[15]城跡や遺跡には形成された背景があり、整備され顕彰される歴史遺産の持つ個性が、現代や将来の地域形成にどう関わるか、地域史を見る確かな目が問われると考える。[16]

上ノ国町の隣町厚沢部町に松前氏の最後の城跡「館城址」があり、町では熱心に史跡指定運動を行っていた。服部さんを上ノ国から厚沢部町にお送りする車中、「何かないですか」と問われ、「整備事業を担当する専門職員の配置を是非」とつさにお答えした。館城址は史跡指定となり、専門職員が配置され整備事業が進められている。後になって気付いたことだが、館城は着工後わずか七五日間で落城となった、短命な城である。どう整備し活用できるのか、担当者の苦悩が思われてならなかった。調査が長期化し、目に見える形での成果が求められた結果の典型が、勝山館跡柵跡の復元整備であると自省する。遅まきながら修正されたが、決して十分ではないことは先に見たとおりである。電子媒体の急速な進歩で無理な復元をしなくても現地での視覚化が可能になりつつあるのは朗報である。

北海道南部のいくつかの自治体に専門職員が配置されている。発掘調査がなくなり、教育行政や社会教育業務を兼務することは常態化しつつある。北海道指定文化財を有しながら、職員配置がままならない町もある。史跡整備事業を弱小の町が事業主体となって疑問をおぼえ出土品ごと所管替えを訴えてもみた。すでに石井先生は「地方の町や村は二一世紀を生きのこれるのか」[17]と今日を見通していた。今の地域の状況は、一つの史跡が起死回生の核を担えるほど甘くはない。北海道の片隅の小さな町で史跡整備に関わった者にまでご配慮下さる服部さんのご厚情をよす

がに、次のあるべきかたちをおねだりする甘えをお赦し下さい。

(1)『史跡上之国勝山館跡・花沢館跡保存管理計画書』(上ノ国町教育委員会　一九七八)。
(2) 拙稿『勝山館跡整備事業と木村さん』「思い北にはせて」二〇〇三(なお、同書には服部さんの寄稿があり、北海道でのお仕事の一端を知ることができる。)『勝山館跡の視点』(「網野善彦著作集月報13」岩波書店二〇〇八)『史跡上之国勝山館跡整備事業報告書』Ⅰ・Ⅱ(上ノ国町教育委員会、二〇〇六・二〇〇七)。なお本報告書Ⅱの勝山館跡調査専門員に渡辺先生とあるのは誤り(同書2頁左欄下)。
(3)『学恩』「であいの風景」(二〇〇二)。当日のままの再録かどうかは定かでない。ひたむきな敬慕ともっと深い悲しみがこもっていたような印象があるが、筆者の思いが重なっているのかも知れない。
(4) 中世の里シンポジュウム実行委員会編『北の中世』(日本エディタースクール出版部、一九九二)。
(5)『史跡上之国勝山館跡』Ⅳ・Ⅴ(上ノ国町教育委員会一九八三・八四)。
(6)『史跡上之国勝山館跡』Ⅶ(上ノ国町教育委員会、一九八六)。復元当初から「まるで〇〇〇〇砦」のようだと芳しくない評があり、後には発掘成果と矛盾し軍事性理解に疑念があるとされた(『史林』九三―一、二〇一〇)。発掘調査では中央通路東西の土塁上で溝に伴う柱穴列が検出された。西側の柱穴列は他の溝との重複もあり、七～一〇cm余の間隔をおいて径一〇cmほどのもの三個、東側は径五cmほどのものをまばらに検出した。調査開始初期の頃で溝覆土中から柱痕跡を検出・掘り分ける技術が未熟なための見落とし、五cm以下の小柱穴は杭先端の残存とも考え、西側の七～一〇cm間隔の柱列が当初の形状と想定した。
(7)『史跡上之国勝山館跡』ⅩⅩⅣ(上ノ国町教育委員会、二〇〇三)、前掲『史跡上之国勝山館跡整備事業報告書』Ⅰ・Ⅱ(注2)。
(8) 前掲『史跡上之国館跡』Ⅳ(注5)。
(9)『群書類従』二三(続群書類従完成会、一九三九再版)。
(10) 服部英雄「中世城郭の復原と史料学」(『遺跡学研究』四、二〇〇七)。
(11)『新編弘前市史資料編』一―二(弘前市市長公室企画課、一九九五)。
(12) 服部英雄編『史跡で読む日本の歴史』第八巻(吉川弘文館、二〇一〇)。
(13) 二〇一〇年「史林」九三―一、同書で国立公園の吉野ヶ里遺跡とともに俎上に載ったのは名誉なことなどと嘯いてはみたが、遠吠えにもならなかった。不真面目であるし何よりも不遜なこととおもっている。なお同書で指摘の「攻めてに対する防戦」については、柵の内側が江戸時代の館神八幡宮建替えなどにより削平されたため不明である(前掲史跡上之国勝山館跡Ⅳ)が、近世遺構との同時表示も含め説明が不十分である。
(14) 千田嘉博「室町の城・戦国の城」(小島道裕編『史跡で読む日本の歴史』第七巻、吉川弘文館、二〇〇九)。
(15) 工藤清泰「中世の里・浪岡まちづくり実験」(『弘前学院大学・短期大学地域総合文化研究所紀要』5　一九九三)。
(16) 拙稿「北方からの視座―上ノ国・浪岡」(『岩波講座日本通史』別巻二、岩波書店、一九九四)。同『北の中世遺跡と石井先生の予見』(「石井進著作集月報10」岩波書店二〇〇五)
(17) 前掲『北の中世』(注4)。

(元上ノ国町教育委員会主任学芸員)

＊服部コメント

松崎さんは北海道上ノ国町の文化財担当者で、史跡勝山館跡の整備ほか中世遺跡の保存に尽力された。勝山館では最初に柵が復原された。のちになって柵は臨時・仮設で、塀が恒常的ではないか、そう考えて、復原根拠を電話でお聞きしたことがある。勝山館は場所によっては数時期に重複する柵列が検出されていて、くりかえし柵が作られて、櫓もあった。